

清水鳩子さんに聞く 日本の消費者運動史



消費者運動との「めぐり合わせ」



目次

1	はじめに.....	2
2	鳩子さんのおいたち.....	5
3	鳩子さんと奥むめおさん・主婦連	10
4	不良マッチ運動の秘話	13
5	海外に目を向けた運動家、野村かつ子・富野七子.....	16
6	主婦会館の建設.....	20
7	主婦会館の日用品試験室.....	24
8	主婦会館の建て替え	25
9	主婦連と地婦連	27
10	未来への提言	29
11	おわりに	30

1 はじめに

消費者問題は日々至るところで起きていますし、なくなることがありません。IT化や消費者取引の国際化等により新たな問題が発生する一方で、日産自動車や神戸製鋼、東レなどの日本を代表するような大企業の偽装行為、大手ゼネコン大林組のリニア新幹線建設工事における入札不正など、時代が逆戻りしたかのような問題が起こっています。コンプライアンス経営やCSRがこれほどまでに叫ばれているのに、未だに大企業がこのような不正をしているのを目のあたりにすると、改めて消費者運動の重要性を感じます。消費者運動の今後のために重要なことは、今の便利で豊かな消費生活が先人たちのどのような努力によって築かれ、一方でどういう問題がその陰で発生し、今日に至っているのかを記録として残し、次世代に伝えることでしょうか。しかし、消費者運動が衰退していると言われてはいますが、同時に、そうした消費者運動を記録に残したり、研究する者も減っています。今年で94歳になる清水鳩子さんは消費者運動の生き証人です。清水さんご自身の目で長年見てきた消費者運動について語っていただき、記録に残す重要性を感じ、この冊子を作成しました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

清水鳩子さんは1924年（大正13年）、母・小芳（こよし）さん、父・専輔（せんすけ）さんのもと福井県で生まれました。現在も、主婦会館（プラザエフ）の館長として、また現役の消費者運動家として活躍しています。ここからは、清水鳩子さんへの敬意と親しみを込め、「鳩子さん」と記します。鳩子さんは、著名な消費者運動家奥むめおの活動を初期から支え、鳩子さん自身もその人生の多くを消費者運動に捧げてきました。奥むめおは鳩子さんの伯母（母の姉）にあたります。戦後の消費者運動を支え、主婦連の数々の運動の現場で動いてきた鳩子さんからどのような言葉が聞けるのか、ここに鳩子さんが語る消費者運動を記録として残します。

（ヒアリング記録）2016年10月5日、12月20日、2017年10月3日の3回にわたり、鳩子さんに主婦会館プラザエフでヒアリングを実施しました。また、日本女子大学細川幸一によるヒアリング（於：日本女子大学細川幸一研究室/2011年1月7日）、日本消費者教育学会関東支部主催・清水鳩子氏講演会（於：城西国際大学紀尾井町キャンパス/記録：横浜国立大学西村隆男教授/2015年5月20日）の記録を参考にまとめてみました。

2018年1月

細川幸一（監修） 加藤絵美（聞き手・執筆）

年表 社会情勢と鳩子さんの出来事

年	年齢	社会情勢	鳩子さんの出来事
1924年 (T13)	誕生		▼和田鳩子（清水鳩子）福井県に生まれる
1930年 (S5)	6歳		▼鍛冶屋を営んでいた父（専輔）が病死、母（小芳）と共に東京へ ▼伯母（奥むめお）が運営するセツルメント（東京都墨田区菊川町）で生活を始める▼墨田区立中和小学校 入学 ⇒P5
1931年 (S6)	7歳	▼満州事変	
1936年 (S11)	12歳		▼高等女学校 入学
1937年 (S12)	13歳	▼日中戦争	
1940年 (S15)	16歳		▼師範学校 入学
1941年 (S16)	17歳	▼太平洋戦争	
1942年 (S17)	18歳		▼師範学校 卒業、国分寺第一小学校で4年間教壇に立つ ⇒P7
1945年 (S20)	21歳	▼東京大空襲によりセツルメント崩壊 ▼終戦	▼社会事業大学に合格。この頃、奥むめおから運動参加の要請があり、運動に協力をするようになる。⇒P7-10
1947年 (S22)	23歳	▼婦人参政権行使／女性国会議員49人当選／奥むめお当選	▼応援演説のために各地を回る ⇒P10
1948年 (S23)	24歳	▼東京都地域婦人団体連盟（東京地婦連）結成 ▼大阪主婦の会、牛肉不買スト突入 ▼不良マッチ退治主婦大会 ▼主婦連合会（主婦連）結成	▼不良マッチ退治主婦大会開催に向けて奥むめおの指示の元、街頭で主婦への参加呼びかけを行なう ⇒P13-14
1949年 (S24)	25歳	▼第1回米価審議会（主婦連・奥会長が委員に）	▼結婚・出産のために主婦連を離れる
1950年 (S25)	26歳	▼米国婦人運動視察のため野村かつ子さんら、渡米 ⇒ P17 ▼主婦連 日用品審査部開設、高田ゆりが専門委員に ⇒P24-25	

1951年 (S26)	27歳	▼主婦連 おしゃもじ登場 ⇒P15	
1952年 (S27)	28歳	▼全国地域婦人団体連絡協議会（全地婦連）結成	
1955年 (S30)	31歳	▼森永ヒ素ミルク事件	
1956年 (S31)	32歳	▼主婦会館 建設 ⇒P20-21 ▼全国消費者団体連絡会（全国消団連）結成	この間、個人会員として主婦連活動に参加。地元での勉強会、奥むめおの選挙活動支援、PTA 活動など
1957年 (S32)	33歳	▼主婦連 不当表示ジュース追放運動始める	
1960年 (S35)	36歳	▼国際消費者機構（IOCU）設立総会 ▼奥むめおを団長に米国の消費者教育視察団派遣	
1963年 (S38)	39歳	▼主婦連 IOCU に加盟	
1971年 (S46)	47歳	▼ラルフ・ネーダー初来日	
1974年 (S49)	50歳		▼主婦連の事務局長に就任
1983年 (S58)	59歳		▼清水鳩子 渡米（アメリカ国務省の招待で40日間にわたり、アメリカを視察） ⇒P19-20
1995年 (H7)	71歳		▼主婦連合会 会長に就任（～1999年）
1997年 (H9)	73歳	▼奥むめお、新しい主婦会館を見ずして亡くなる	▼主婦会館建て替えに向けた資金集め ⇒P26
1998年 (H10)	74歳	▼主婦会館 全面建て替え ⇒P25-26	
1999年 (H11)	75歳		▼主婦連合会 参与になる
2009年 (H21)	85歳		▼一般財団法人主婦会館 理事長（現在に至る）

2 鳩子さんのおいたち

<戦争と鳩子さん>

安保法案が可決し、北朝鮮との関係が悪化するなど政治情勢が不安定な中で、鳩子さんへのヒアリングを始めました。開口一番、鳩子さんが語ったのは「戦争」のことでした。鳩子さんの消費者運動の原点がここにあるのかもしれないと悟りました。

戦争は絶対だめ。あんなことをしちゃいけないのよ。言いたいことも言えない、やりたいこともできない、私たちの生活が一変するということを、今の人たちにもわかってほしいわ。戦中は批判なんてできなかった。優等生であることがベストだった。変だと思っても、言えない。今は違う。声をあげられる時代に生きている。テレビで戦争のシーンをみても、今の若い人は分からないのかしらね。イメージがわからない。実感が無い。二度と再び戦争をやってはいけない。家族が死ぬ。子どもを女性一人で育てる苦勞。

鳩子さんの人生は、戦争とともにありました。子ども時代を振り返ると、いつも戦争がつきまわっていました。良い子であることを求められ、思いを押し殺しながら生きた子ども時代を振り返りながら、鳩子さんは伯母である奥むめおや、母の小芳が育った明治時代の教育がうらやましかったと話します。明治の女性が自由に思いを語る一方で、戦時教育を受けてきた鳩子さんには、思いを語る機会が得られなかったという悔しさがにじんでいました。

<セツルの子と呼ばれた子ども時代>

鳩子さんが6歳の時、父親が病死しました。生計をたてなければならない鳩子さんの母（小芳）は、東京目白にある保母学校に通い、保母の資格をとり、奥むめおが運営していた婦人セツルメント¹（東京都墨田区菊川町）で保母の仕事を始めました。セツルメントで暮らす鳩子さんは、近くの小学校（現：東京都墨田区立中和小学校/菊川1丁目18番10号）に通



¹セツルメント(settlement)とは、特定の場所（居住区）における医療・教育・保育・授産などの活動を通じて、労働者や生活困窮者等を支援し、地域の福祉をはかる社会事業であり、またその施設や団体のことを指します。

ていました。先生から「セツルの子」と呼ばれた当時のことを次のように振り返ります。（P5-6 の写真：主婦会館提供／1933 年セツルメント）

ふつう、通信簿をもらっていい成績だったら、学校から帰ってきてお母さんやお父さんに見せるでしょう。でも私はそういう経験がなく、セツルの保母さんにみせていました。私は小さいときから、ランドセルも洋服も新しいものを着たことがないのです。いつもバザーに出ってくる洋服を着せられるし、そこで売っているランドセルを買う。自分の使ったものはバザーに出すから、誰かが使っています。だから親に買ってもらったものを着たりした喜びがないのです。

当時、セツルメントでは多くの子どもが過ごしていました。通ってくる子どももいれば、家族全員で住んでいる人もいました。職員は 7 ～ 8 人いて、泊まり込みで、裕福な人も、貧しい人もいました。セツルメントのすぐ横には鳩子さんの友だちの親が経営する鉄工所がありました。保母さんが歌を歌ったり教えたり、今の幼稚園と同じです。鳩子さんが鮮明に記憶しているのは、子どもが入ってはいけない部屋があり、一度だけ見てしまったのは、産婦人科のベッドのようなものがあったこと。大人になってから分かったのは、そこでは産児調節をしていたのだらうということです。



私は子どものときに特別高等警察が（セツルメントの）玄関から靴を脱がないで入るのを何回も見ました。私は「おじさんはなぜ靴を脱がないの？」と聞いたのを覚えています。ああいう人は靴を脱がないで入るのです。

しかしこのセツルメントは、1945 年 3 月 10 日の東京大空襲で燃えて無くなってしまい、その後は再建ができませんでした。早くに父を亡くした鳩子さんは、母の苦勞を目の当たりにし、自分自身も女性が職業をもつことの重要性を実感していました。鳩子さんの本当の夢は、医者になることでした。しかしその道を諦め、教員となった経緯を次のように語っています。

<教育の大切さ>

女も何か職業を身に付けないと生きていけないというのは、親を見ていて分かります。それで何とかしなければいけないと思ったけれど、本当は女子医大に行きたかったのです。成績では十分行けたのですが、月謝を調べにいったら、とてもお父さんがいない私の家庭には……。(高額で)とてもじゃないけど母親には絶対に言えなかったので、女学校を卒業してから給費制の師範学校に行ったのです。小学校の先生を4年くらいやりました。生涯、先生をやろうと思ったのですが、終戦を契機に辞めました。どうしてかと言うと、私の勤めていた小学校(国分寺第一小学校)は1000人ぐらい生徒がいて、戦争中は半分陸軍が駐屯していたのです。夜になると、伍長が外で下っ端の二等兵をいびるのを見ました。戒めのために下っ端の兵隊を狭い牢屋に入れることも行われていました。終戦になった途端に偉い人が、自分の食料や衣類だけ馬に乗せて逃げたのです。そうしたことをたくさん見ました。それで、嫌でもう辞めたいと言ったのです。あのころは代用教員ばかりで師範学校を出た先生が少なくて、男はみんな兵隊に行ってしまうから(私のことを)辞めさせてくれないのです。

いまでも覚えています。校長先生が、僕がいいお婿さんを探してあげるから辞めるなど言ったのです。それもカチンと来ました。1年、2年待ったけど辞めさせてくれないので、私は社会事業大学の試験を受けたのです。そしたら受かったので、合格証を見せたら辞めさせてくれました。それから社会事業大学へ。(その後)社会事業大学はやめました。奥先生に引っ張られたので、半年ぐらいしか行けませんでした。

教員という職業についたことで、戦中・戦後教育の現実を知り、鳩子さんが本当に受けたかった教育とは大きく乖離していたと気づいたのです。だからその道を自ら離れました。鳩子さんは、「明治時代に生まれたかった」と仰っていました。(右の写真は鳩子さんが19歳の頃)



奥先生もそうだし、うちの母もそうですが、明治の教育は考え方が自由です。私は、小学校1年に入るときが満州事変で、女学校に入ったときが日中戦争、師範学校に入ったときは大東亜戦争（太平洋戦争）と、全部区切りが戦争ですから、明治の人の教育がうらやましいです。母は「こんな戦争勝てるはずない」と言って防空演習に行ったことがありません。防空演習って、バケツに水を入れて、リレーをして掛けるでしょう。各家庭から1人ずつ出なければいけないのに、母は行ったことがない。空から爆弾を落とすのに、バケツで水を運んだり、側溝へ隠れたりしろと教えられる。「ばかみたい。あんなこと、私は嫌だよ。それなら死んだほうがいいの」と言っていました。それだけはよく覚えています。私は小学校から戦争だったので、そんなことを言ったら憲兵に連れていかれると思って、母の代わりにしよちゅう行きました。「お母さん、具合が悪いものでごめんなさい。私が代わりに働きますから」と、一生懸命にやっていると、おじさんが「あんた、偉いね」と褒めてくれました。学校の生徒が防空演習に出てくるなんて、おじさんに見れば偉い子だと思ったのでしょう。「母が行きたくないと言いました」なんて言えません。



後列の左から2番目が鳩子さん



学友と



在学中の義務だった農業支援事業の風景

明治時代の女性は発想が自由です。（女は選挙演説を聞きにも行けない時代でしたので）奥先生はお兄さんのマントと帽子をかぶって演説を聞きに行って、女だとわかってしまってお巡りさんに引っ張り出されたと言っていました。私はそんなことはできません。お国のために何でも言うとおり一生懸命にやるのが「いい子」で、それが当たり前だと思ってずっと教育を受けてきているから、今でも明治の人がうらやましいです。だから、教育はとても大事です。私は、子どもは公立に入れず、上の子も下の子も私立に入れました。近所の人、なぜ近所の学校に入れないのかと言いますが、私立のほうがもっと自由に教育を受けられると思いました。幼い頃の経験は取り返しがつきません。どうしようもない。「嫌なら嫌だと社会に対して反対すればいい」と人は言いますが、反対できるような教育を受けたことがなく、学校の先生が右と言えば右、左と言えば左なのです。これからの若い世代には、もっと自由な発想を持ってもらいたい。子どもが高校などで先生に口答えをしたり注意されたりしても、結局苦労するのは自分だから途中でとめませんでした。やるところまでやって苦労し、自分が自分の考え方を直せばいいわけです。周りが助けることはないと思いました。社会にいったら、いつまでも親が付いているわけではないですからね。途中はいろいろありましたが、ちゃんと育ちました。



学友との集合写真

<母との思い出と最期>

既述のとおり、鳩子さんの父は6歳の時に病死したため、その後は母が一家の生計を担うことになりました。母親は奥むめおとは性格が全く違い、消費者運動を嫌っていた様子を次のように語っています。

奥先生と母の関係は、あまりよくなかったです。彼女は、奥先生のように人を集めたり大勢で何かをしったりするのが大嫌いでした。私の母は、人がいっぱい集まって同じことをやるというのが、鳥肌が立つくらい嫌だと言っていました。ちょっと芸術家的な人で、1人が好きな人です。姉妹でも全然違います。小唄の師匠をやったり、絵も上手で二科展（展覧会）に出したこともあった。母は県立福井高等女学校を卒業し、津田塾大学（当時の津田英学塾）に通った。夜中に押し入れの中で懐中電灯で猛勉強したそうですが、関東大震災で学校も家も燃えてしまい、福井へ帰って結婚をしました。私の母が90歳で亡くなる時（最期に）「あなたにいつまでいから贅沢をさせたかった」と言っていました。私は贅沢を知らないのです。最期にそう言って亡くなりました。

3 鳩子さんと奥むめおさん・主婦連

社会事業大学に入って半年のころ、鳩子さんは奥むめおに誘われて、選挙や消費者運動に携わるようになりました。

奥むめおは、女性の地位向上や政治活動の自由を求めて、大正9年に結成された団体、新婦人協会で平塚らいてうや市川房枝とともに活動をしていました。敗戦後、女性も参政権を得て、政治の世界に活動の場を広げることができるようになり、昭和22年、初の参議院議員選挙に出馬し、当選しました。鳩子さんは、奥むめおの選挙活動を支え、各地で繰り広げられる応援演説に立ち会ってきました。

社会事業大学に行っているときでも、奥先生の選挙応援に全国に行きました。奥先生は、主婦連ができる前に当選しています。主婦連合会という組織は無いけれど、そういうことをやっていたので、全国ネットはあったのです。セツルメントだけではなく（女性の）社会運動です。市川房枝などとやっていました。

<参考>

西暦	和暦	消費者運動・政治など
1945	S20	広島、長崎に原爆投下、終戦 ◇戦後対策婦人委員会結成（市川房枝、山高しげり、赤松常子ら） ◇「鴻池主婦の会」（大阪）結成・会長／岩崎歌子 ◇「新日本婦人同盟」設立（市川房枝ら）※1950年に「日本婦人有権者同盟」と改称 ◇「日本協同組合同盟」結成・会長／賀川豊彦
1946	S21	日本国憲法公布 ◇鴻池主婦の会「主婦の店」開く ◇いもよこせ大会、米よこせ大会
1947	S22	婦人参政権行使 第1回参議院選挙、衆議院総選挙で女性国会議員49人当選（奥むめお当選）
1948	S23	◇大阪主婦の会、物価引下げ、闇値撲滅を目指し、牛肉不買スト突入（8月） ◇不良マッチ退治主婦大会開催（9月） ◇主婦連合会結成（10月）



選挙事務所の前で当選を喜ぶ・中央右側の着物姿が奥むめお（提供：主婦会館）

<女性議員・奥むめお>

「台所の声を政治に」をスローガンに、奥むめおさんは 1947 年（昭和 22 年）に国会議員になりました。当時、女性が 49 人も当選しました。

東京大空襲は昭和 20 年、主婦連ができたのは昭和 23 年です。戦争が終わって、婦人に参政権、被選挙権が与えられて、奥先生が第 1 回参議院議員に立候補し当選しました。選挙活動の応援のために全国各地を巡りました。奥先生は娘の（中村）紀伊さんや息子の杏一さんを抱えて、地方へ講演に歩きました。有名な話は、杏一さんを預ける人がいないからおんぶしながら講演したり、演台の横に自分の羽織を置いて子どもを寝かせて、自分は壇の上にあがって演説していた。見るに見かねて、みんながあやしていたと。福井へ演説に行くにもお金がないので、静岡まで買える分だけ買うのですって。お金が足りないから降りられないので、駅員さんに誰々を呼んでくれと言って、地方の会長さんと呼んでお金を払ってもらって、講演に行つたと。紀伊さんもそうやって地方に連れて歩かれた。紀伊さんは、杏一さんみたいにおとなしく寝ていなかったらしいです。走り回ったり、泣いたりして、あの子は手がなかったと言っていました。

現在、女性議員がとても少ない。いま、一番少ないのではないですか。（当時は）お金（供託金）がなくても選挙に立てたのです。私は覚えていますけど、静岡に自民党の偉いおじさんがいるのですが、なぜ奥先生が自民党を応援するのか知りませんが、うちの（鳩子さんの）夫が、自民党だろうが共産党だろうが応援する奥先生をみて、許せないと言っていました。奥先生は 3 期受かり、18 年やっています。1 回目の当選は、戦前から戦後の社会運動をやっていたから、組織というか、奥先生を応援する人はいっぱいいました。例えば京都に行けば奥先生のために車を用意して、車の上に乗って応援する人はどこへ行ってもいくらでもいたのです。支援者が地域にいた。奥先生は、主婦連の会長を兼務しながら最後まで参議院議員でした。病気になって議員を辞めても、（主婦連の）会長をやっていました。

<奥むめおからの忠告>

国の委員会の委員になるにあたって、奥むめおから言われたことを、鳩子さんは次のように語っています。鳩子さんが「消費者の声の代弁者」としてこれまで活動してきた原点がここにあります。

私が初めて米価審議会の委員になる時の話しですが、そのとき奥先生からは、「あなたは専門家・学者ではないよ」と言われました。それは当たり前だと思っていたから、「分かっています、では先生、何ですか」と聞くと、あなたは消費者の声の代弁者だ。みんなの意見を聞いて、それを審議会で言うのがあなたの務めだ。だから、それが自分でできなかつたら、辞めさせられるのではなくて自分から辞めなければ駄目だよ。その約束が守れるなら推薦をする。それが約束できますか、と言われたから、分かりましたと答えました。だから私はいつも、今でも出るときは、私は専門家ではない、消費者の声の代弁者なのだから、みんなの意見を聞いてと思っています。

4 不良マッチ運動の秘話

「大阪での牛肉不買運動²の報告を受けた東京の活動家たちは、東京で何をすべきか話し合った末、1948年9月3日、渋谷の社会事業館で不良マッチ退治主婦大会を開催した³」とされています。大阪の消費者団体の様子が記事で伝えられ、それを知った東京の団体が動いたと鳩子さんが仰っています。この不良マッチ退治の大会の裏側はどのようなものだったのでしょうか。実はあまりその詳細が語られている記録がありません。鳩子さんは当時を次のように振り返っています。

² 1948年に大阪の地域の婦人団体の中でヤミ退治運動が自然発生的に生まれた。大阪主婦の会は、貴重な蛋白源である牛肉が公定価格40円なのに250円で販売されていることに対して不買ストを展開した。

³ 「戦後消費者運動史」国民生活センター（平成9年3月30日）P27

「燃えないマッチを持ち寄る会」というアイデアですが、私は9月2日に奥先生が乗れと言うのでライトバンに乗ってメガホンで、私は下町のほう、紀伊さんは真ん中のほうで、「明日どこどこで燃えないマッチをいいマッチに取り換えるから、持ってきてください」、と朝から晩まで宣伝して回ったのです。（まだ主婦連発足前で）組織も何もなかったので、原宿の竹下通りの近くに社会事業会館というのがあって、そこでやるから来てくださいと。9月2日に行つてこいと言うのでずっと回って歩きました。夜になったら奥さんは、「あした来るかね？」（明日、多くの消費者が集まるかどうかという趣旨）と言ったのです。そしたら（当日）、みんなあつちからこつちから来たのです。近所のマッチをみんな預かって来たのです。私は用意したマッチは全部取り換えたと思ったら、たくさん来てしまつて半分しか取り換えられなかった。

だけど、マッチは配給でしょう。統制でしょう。なぜいいマッチだけもらえるのですか。変じゃないですか。ヤミのマッチは不良品が多いのが分かっているから、GHQと経済安定本部が企業を締め付けるために仕組んだのだと私は思います。だって、考えられますか。配給では、決められたマッチしかくれなかったのですよ。それなのに、トラックいっぱいいいマッチがなぜどこから来たのか。（なぜ良品マッチを集めることができたか、）それは野村かつ子さんが知っています。彼女はアメリカ帰りだったから。GHQと経済安定本部はヤミ撲滅、治安維持でしょう。戦後の混乱を防ぐには、ヤミが流行ったりしたら困るから、きっと誰かいたのだらうと思います。でなければ、どう考えても配給のマッチが、トラックいっぱい来るはずがないでしょう。

燃えないマッチを持ち寄る会のあと、マッチの統制が外れて自由価格になります。そのときに、（渋谷の）社会事業会館の前にタイガーマッチやつばめマッチなど大手のマッチメーカーの社長がずらつと並んでつるし上げられて、「申し訳ございません」と言っている。あれを仕組んだのは、経済安定本部だと思えます。素人ではどう考えてもそんなことはできません。野村かつ子さんが、「あなたに死ぬ前に言うておくことがある」というのを、聞かずに死んでしまったのが残念でしょうがないです。

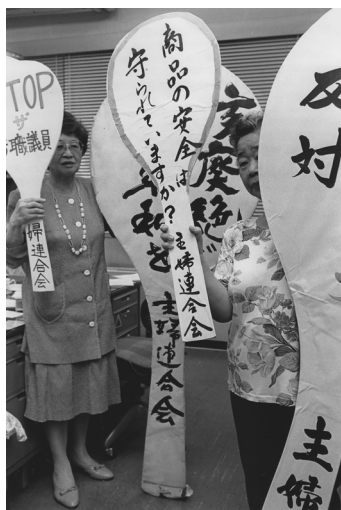
奥さんは、石鹼でもやったのです。石鹼は配給なのに、いい石鹼があるのです。それをトラックに乗せて、朝から晩まで売って歩いていました。勝部さんも私も紀伊さんも、最初は主婦連の運動は物を売ることからスタートしました。

<主婦連から離れていった仲間たち>

鳩子さんは、共に運動をしていた仲間が主婦連を離れていったことを回顧しました。活動方針が合わなかったことが原因でした。どのように資金を調達し、活動に活かすかは、組織内で様々な議論がありましたが、結果として、主婦連を去っていった運動家も多かったようです。鳩子さんは、三巻秋子さん、野村かつ子さんのお名前を挙げました。

三巻秋子さんは1964年（昭和39年）に主婦連を脱退し、消費科学センターを設立し、消費科学連合会（消科連）を結成しました。三巻さんは、1951年（昭和26年）から13年間、主婦連の副会長を務めました。

三巻さんは魅力的な人で私は大好きでした。主婦連の運動の初めのアイデアの多くは三巻さんです。すごいアイデアマンでした。自由が丘でやった集会で、奥先生がこぶしを振り上げて、後ろにしゃもじが立っている企画も三巻さんです。しゃもじに書く言葉を考えたのも三巻さんです。実質的に消費者運動のプランを立てたり運動の波をつくったのは、三巻さんと春野鶴子さんでした。私は子育てから主婦連に戻ってきたら、三巻さんがもういなかったのです。



左の写真の左側の女性が鳩子さんです。右の写真は、1975年の国際婦人年日本大会の様子です。壇上には多くの団体がプラカードを持って並んでいますが、一つだけ「しゃもじ」が写っています。しゃもじが、主婦連の存在を目立たせ、主婦連の運動の象徴となっていました。

野村かつ子さんは、終戦後 1945 年（昭和 20 年）から日本協同組合同盟で生協法の法制化のために GHQ との折衝を行ない、主婦連発足に直接携わった後、1949 年（昭和 24 年）からは日本婦人有権者同盟に参加し、1959 年（昭和 34 年）からは総評主婦の会で活動するようになりました⁴。

主婦連の不良マッチ運動の頃、野村かつ子さんらが受け付けをやっていたのですが、主婦連が発足してしばらくすると皆なくなりました。裏の話はわかりません。何か問題があったのではないかと思います。GHQ との関係があったのではないのでしょうか。それと安本（経済安定本部・経済企画庁の前身）が主婦連を使ったでしょう。そういうのを、左翼の人が批判したのだらうと思います。そういうところからお金が来たり。そういうのも使うのを許せなかったと思います。

ヤミ撲滅とか、占領政策でアメリカと安定本部とは一体ですよ。奥先生は企業から直接お金をもらうことも平気でした。私がいつか奥先生に文句を言ったときに、奥先生はこう言ったのです。「そんなこと、どうでもいいじゃないか。自分がしたいことを手伝ってくれる人がいたら、誰でも手伝ってもらったらいじゃないか」と。「自分がしたいことを助けてくれるのなら、誰だっていいじゃないか。あんまりごちゃごちゃ言いなさんな」と言われました。企業からお金をもらっていると、自民党の応援しているとかなれば許せない人も多いです。

5 海外に目を向けた運動家、野村かつ子・富野七子

鳩子さん自身もそうですが、鳩子さんの周りには運動の初期から海外に積極的に目を向ける仲間がいました。野村かつ子さん、富野七子さんについて鳩子さんは懐かしそうに話し始めました。

<野村かつ子さん>


野村かつ子さんは西陣に生まれ、家は織物屋でした。同志社大に行っていました。彼女が最初にアメリカに行くのは、アメリカ国務省の招待でした。自前ではないです。あのときは正式な訪米団でしたけれど、その後、野村さんは留学にも行きました。留学は自分で行ったのです。最初、野村かつ子さんは GHQ と接点がありました。

⁴ 「わたしの消費者運動」野村かつ子（著）・石見尚（編）2003 年 P310

野村かつ子さんは、1910年（明治43年）京都・西陣生まれの社会運動家です。戦後、日本協同組合同盟、主婦連、婦人職業協会、総評主婦の会などで活動を展開しました。アメリカの消費者運動の草分けである弁護士ラルフ・ネーダーの著書を日本で紹介するなど、海外に積極的に目を向けた運動家の一人です。1950年（昭和25年）、アメリカ国務省の招待で、日本婦人有権者同盟を代表し、渡米しました。また「主婦連たより」に「海外だより」という記事を7年間、提供をしていました。主婦連に国際的視野をもって活動するための情報提供を行っていました。鳩子さんの話しの通り、GHQとの接点は、野村かつ子さんにとって大きな転機となったようです。「アメリカの進歩的人士を知る機会を得た。これは当時の日本人としては、視野を広げる数少ない幸運に恵まれた」と著書（「私の消費者運動」2003年）に記されています。（右の記事は主婦連たより2010年9月15日第733号より）

野村かつ子さん亡くなる

日本の消費者運動・市民運動の先駆者、野村かつ子さんが八月二一日、東京都内の自宅で亡くなりました。九



野村さんは、米国の運動家兼弁護士ラルフ・ネーダーさんの活動を日本に紹介し、とて有名です。ネーダーさんは何度も来日し、消費者団体と交流を重ねました。

また、東京弁護士会の「人権賞」、韓国の「アルカ賞」、市厚労基金援助賞など数々の賞を受けておられます。第二回OCCU（国際消費者機構）世界大会（バンコク）で名誉顧問に推薦されました。

主婦連合会にとって忘れられないのは、機関紙「主婦連たより」七十年（七）「海外だより」を筆を続けて下さったことです。

晩年は、ご自宅で国内外の友人達と楽しい交流を続け「私は生涯現役」とおっしゃってました。

長い間ありがとうございました。

<富野七子さん>

事務局にいた富野七子（旧姓：伊藤）さんは、主婦連もやめてしまって、若くして亡くなりました。逗子の市長夫人（夫：富野輝一郎）です。明治学院大学の学生のときに主婦連にアルバイトに来ていて、私と一緒に働いていました。私は、次はナナちゃんが主婦連を継ぐから大丈夫だと思っていました。そういうセンスがある人でした。自分も一生懸命で野菜でも魚でも売りに歩けるから、私はこの人が次にやってくれるからと彼女にいろいろ話をしたら、「私はやる（主婦連を継ぐ）」と言ったのです。そしたら、突然大みそかの夜に電話がかかってきて、「清水さん、ごめんなさい。私、結婚しました」と言うから、「誰と」と聞いたら、「いま風呂敷一つ持って、逗子の富野のところに来た」と言うのです。「えーっ、結婚しても主婦連はやるの？」と聞いたら、「やります」と言ってくれたのです。

富野七子さんの夫は1984年（昭和59年）11月～1992年（平成4年）の間、逗子市長として務めました。富野七子さんは、アメリカ生活の中で、ラルフ・ネーダーに來日を直談判しました。その様子が、主婦連創立30周年記念文集にあります。

～富野七子さんのラルフ・ネーダーへの直談判～（主婦連と私・創立30周年記念文集／1978年より抜粋）

私がラルフ・ネーダーを知ったのは今から9年前の春頃だった。当時、日経新聞の海外特派員だよりという欄に、「無名の34歳の弁護士が、欠陥車を摘発。アメリカの巨大企業、ジェネラルモーターズから賠償金をとり、これを財源にして、主婦・学生と共に消費者運動を展開。大活躍している」という記事が掲載された。その頃の日本の消費者運動といえば、消団連に参加する団体も少なく、主婦連は相変わらずおしゃもじ片手にいささかたびれが目立ち、私は歯ごたえのない日々を送っていた。運動の裏を支えるスタッフの一人である私は、ただただ自分の無力をはじ、存在感さえなく、視野狭窄の中にあっただ。 （中略） 私は、7月から長年の希望であったアメリカ生活の体験に向かって旅立つことになっていた。「アメリカに行ったら、ネーダーさんに会って、日本の消費者にはっぱを掛けに来よう交渉してみる」と冗談を言って、周りの人たちを笑わせた。内心、ネーダーさんなる人物が本当にいるのだろうかと思っていた。1969年10月1日の午後、私はネーダーさんとスタンフォード大学のスペイン風の庭に立っていた。私はテープレコーダーを片手にたどたどしい英語で、夢中で、日本へぜひ来て下さいとお願いした。長身で精悍なひとみはやさしく実に印象的だった。翌年の三月、サンフランシスコの体育館で開かれた三千人におよぶ聴衆を集めた大講演会で、またおめにかかり主婦連だよりを手渡すことができた。その二年後には、ネーダーさんが日本に見えた。（中略）日本におけるネーダー旋風は強かった。しかし今年2月、氏のグループが提案の消費者庁設置法案が下院で否決され、彼に対しなにかと罵詈雑言が流れている。運動を続ける人間や組織にはつきものの、つらい冬の時代が氏にも到来したようだ。主婦連も30年、もう少しスマートに運動を展開できないものだろうか、今度は日本からアメリカへ成果を掲げてハっぱを掛けに行きたいものだ。

<鳩子さんの渡米>

野村かつ子さんと同様、鳩子さんも渡米によって様々な変化があったようです。1983年にアメリカの国務省の招待で、40日間の旅程で渡米しました。アメリカ政府の資金で渡米するにあたり、「いくらアメリカ政府がお金を出してくれたって自分自身の主義主張を曲げないわよ」という構えだった鳩子さん。しかし、渡米により多くの人と出会い、鳩子さんの視点は大きく変わりました。その時のことを次のように振り返っています。



いまから30年ぐらい前です。私は米価審議会の委員で、一生懸命やっていました。アメリカというのは面白い国だと思ってひいきになってしまったのですが、条件は何もなしで、私が行きたいところはどこでもいいというのです。だから私は消費者関連施設を見たい、米国の農家を見たい、ホテルではなくて農家に民泊したいと要望を出しました。アメリカの農村女性の生活ぶりや、アメリカの農業実態を具体的に知りたいと強く要請したら、私の希望は100%叶えてくれました。全ての旅費に加え、日当も出ました。視察など初めてでした。ちょうど1983年は自由化の時期でした。せっかくアメリカ政府のお金で1カ月間（40日間）アメリカに行って、帰ってきたら私は自由化反対と余計言うかもしれませんがそれでもいいですかと、契約を交わすときに言ったら、いいと言ったのです。構わない。どうぞあなたの好きにと言ったのです。見るところもあなたが好きなところを選びなさいと言ってくれた。日本は自由化反対と言ってもいいのかと何回も念を押したら、いいですと言って、宿泊費までくれました。それで行ってきました。

<参考>

アメリカ国務省は、1940年からInternational Visitor Leadership Programを提供しています。このプログラムは、社会人・専門家を対象とするもので、政治・経済・文化等、各分野のリーダーによる3週間の米国研修（人物交流プログラム）です。これまでに小池百合子氏（1983年）、野田聖子氏（2005年）、福島みずほ氏（1993年）などが国務省の審査によって選ばれています。

アメリカに行くと、行く先々で「あなたみたいな人が、どうして Housewives' Association なんていう差別団体にいるのか」と問われました。皆にばかにされ、日本に帰国したら主婦という名前を変えようと思いました。「女性とは言うけど、主婦なんて言う人はいないから、変えよう」と言ったら反対が強く、歴史があるものだから変えられませんでした。当時の事務局長が「清水さん、しょうがないから、しゅふれん、ってひらがなにしたらどうか」と言いましたが、そんなのは余計わけが分からない。組織名称の変更に関しては、会員の反対より、意外にも男性ジャーナリストの反対が多かったです。伝統・歴史がある名前をどうして放り出すのか、もったいないと言われました。私はなるほど、そういう考え方もあるかと思いました。私の娘は 60 を過ぎましたが、彼女が学生時代に「ここは主婦でないと入ったらいけない」と思っていたそうです。結婚していないから主婦会館に入れないと思っていたと言うのです。長男も「男は入れない建物だ」と言っていました。またあるとき、若い女性から電話がかかってきて、「主婦連の事務局に勤めたいのだけど、雇ってくれますか」と言うから、「いいよ、大歓迎よ。どこの方？」って言ったら、上智の学生でした。「どうしてそんなことを聞くの？」と聞いたら、「私は学生で、主婦じゃないから」と言われたのを覚えています。ある時は「僕は男なのですがいいですか」とか。いまでもそういう電話もあるのですよ。だから 30 年前、私は本気で組織名称を何とかしようと思ったのです。私自身、若い人が入りやすい名前にしたいらと思うのです。50 周年を機会に規約を改正して、男性も会員になることができるようになりました。男性も何人かいますが、主婦会館とあるせいで日常的に女の人と同じように参加する人は少ないです。

6 主婦会館の建設

主婦会館は、消費者の権利を守る運動の拠点として、1956 年に建てられました。初代理事長は、奥むめおです。1998 年に主婦会館プラザエフとして改築し、消費者相談や消費者セミナーなどの公益事業の運営を中心とすると同時に、会議場を一般に貸し出し、様々な交流、会合、活動の場として活用されています。四ツ谷駅前の一等地に、消費者運動の拠点があることは、多くの消費者運動家の誇りと励みになっていたようです。建設までの経緯を、鳩子さんに伺いました。



昭和 31 年 テープカットをする奥むめお
(写真提供：主婦会館)

会館の土地は、平凡社の社長・下中弥三郎氏から譲り受けたものです。寄付ではなくて、安く買ったのです。最初は市川房枝さんが下中さんに呼ばれたので、市川さんが行きました。市川さんはただでくれると思ったら、お金が要ると言われた。下中社長には、市川さんのほうが優先順位は上だったのではないですか。それで呼んだら、ただではなかったので市川さんはキャンセルしたのです。

(市川さんは) 婦人参政権の婦選会館(現：東京都渋谷区代々木 2-21-11) を作りたかった。しかし当時、四谷の土地はあきらめた。市川さんが断念したので、2 番目に奥むめおがあがったのです。そのとき、私は奥さんに付いて一緒に行ったのです。いまでも覚えています。四谷の土地を(下中)社長と一緒に見に行ったのです。あの辺は住宅地で、塀のあるお金持ちのお家ばかりでした。ススキがいっぱい生えていてお店は 1 軒もないし、電車は都電が通っているだけで地下鉄はないし、田舎でした。それで奥さんが、私に「こんな田舎は嫌だね」、と言ったのです。それで私が、先生どこがいいのですかと言ったら、「それは決まっている。丸ビル、東京駅の前だ」と言った。すごいですね、あの人。普通に言いました。へえ、そうですかと言いました。いまはあの土地があるから、やっていけるのです。借りた土地だったら、とてもじゃないけれど。

婦選会館とは（女性と政治センターHP より）

1962年に自治省（当時）認可の「財団法人婦選会館」として設立、初代理事長は女性参政権運動を生涯貫いた市川房枝。創設以来半世紀にわたり、民主的プロセスを経て社会のあり方を決める男女市民主体の方針決定を実現することを使命と考えて、女性が政治プロセスに関わるための政治教育・情報発信・市民活動支援・国際交流や婦人参政関係史資料の保存と公開、国内外研究者等への情報提供を行ってきました。1981年、市川房枝の死去により財団名を「財団法人市川房枝記念会」に改称、2009年には平和で平等な市民主体の社会の更なる実現を促進するために「財団法人市川房枝記念会女性と政治センター」として新たなスタートを切りました。さらに、公益法人認定を受け、2013年4月1日より「公益財団法人市川房枝記念会女性と政治センター」に移行しました。

下中弥三郎とは（兵庫県篠山市「丹波篠山の有名人」HP より）

下中弥三郎は明治11年(1878)、今田村（現今田町）立杭に陶工喜久蔵の子として生まれましたが、早く父を失い、母の手一つで育てられました。持ち前の辛抱強さと頑張りによって、小学校卒業後は独学によって教員検定試験を受け、小学校教師となり、また師範学校の教師となった。さらにはジャーナリストに転じて、婦人の地位向上運動にも積極的に活躍した。そして昭和の初め、「平凡社」を起し出版事業を始め、世界美術全集、大衆小説全集、百科全集等を次々に世に出し、一躍出版界の第一人者となった。その後、世界連邦を主唱し、世界平和7人委員会のメンバーとして活躍するとともに、日中文化交流にも大きな役割を果たした。下中弥三郎伝刊行会編「芳岳」の8月号の中に「弥三郎は陶工の外は、常に一介のサラリーマンに過ぎなかったが、常に己の事業、己の仕事としてベストをつくした。やがてその集大成が、『平凡社』という自己の事業に発展した」と記されている。

写真：「アジア主義から世界連邦運動へ」（著：中島岳志）の表紙



四ッ谷の土地の取得背景について、奥むめお自身は次のように記しています。

～ありがとう～主婦連創立 30 周年の記念文集（1978 年）奥むめお

（前略）四谷駅前の主婦会館の現在の地は、亡き平凡社社長の下中弥三郎さんが、奥むめおに売りたいと云って下さったのです。それには一つの条件がありました。長い貧乏生活を続けてきた奥氏のことだから 1000 万円あまりの金を耳を揃えて持つてくることは難しかろうが、平凡社としてはこのいい土地をよその競争者にとられてしまうのはあまりにも惜しいと。この使いに立たれたのは平凡社の会計部長斎藤道太郎さんでしたが、私は斎藤さんとも相談をして、まとまった金子が出来ると、斎藤さんにこの金子を渡し、これから後のプランを下中さんに話してもらいました。神仏の加護のもとにどうしてこの大金が私に出来たか、今では思い出せない位ですが、（中略）、建築にかかったのは大林組でしたが、大林組もわたしの貧乏に引かかって出世払いということにして下さいました。（中略）。都会では 1 冊 20 円の主婦手帳を売ったり、農村ではお米の一握り運動を始めて頂いたりして会館の建設資金を集めました。落成式の日には主婦会館の玄関には、北海道や、青森や、秋田、新潟や、群馬、埼玉、福井などから送って下さった白米の俵が山と積まれていました。（後略）

建設資金は、女性ら自身と、その女性を支援する男性や財界人が協力し、集めたことがよくわかります。鳩子さんは当時を振り返り、男女関係なく一つの目標に向かって皆が動いていたことを懐かしく話されました。

奥先生に（ひとりで四谷の土地を買うだけの）お金はありませんでした。主婦会館を建てるころの最初の目的は募金目標額 600 万円でした。しかし、募金を始めたら、建設資金 1 億 2 千万円を集めることができたのです。寄付した人の名前と金額まで全部書いています。手帳を作って 20 円で売ったり、ふきんを作って売ったり、キャベツやみかんを売ったり、墨を売ったりしてやったわけでしょう。多くの方が助けてくれたから建ったのです。寄付もあつたと思いますが、あれを見ると、本当にみんなが助けてくれたから会館ができたと思います。逆に言うと、主婦の力だけで建ったのではないということ。財界も。だけど、いまの時代の財界みたいに寄付したから云々という短絡的なものではなくて、社会のために働いている女性を助けようという人たちが、金持ちの中にいたのです。いまはそういう人はいません。自分の会社が大変だから。

7 主婦会館の日用品試験室

奥むめおは、1950年（S25）に主婦連に「日用品審査部」を新設し、高田ゆりが専門委員となりました。その後、高田は審査部長、調査部長を経て、1956年（S31）の主婦会館設立と同時に「日本ではじめて、消費者のための、消費者によるテスト機関、日用品試験室⁵」が設置され、主任になりました。その時のことを鳩子さんは次のように振り返っています。

奥先生が言ったのは「私はこの建物の中で一番お金をかけてスペースをさいておきたいのは日用品試験室。それはなぜかって言うと、これからの時代は、ただ高いとか、品物が悪いとか言うだけじゃなくて、科学的な目を持ったテストをしなければならない」と言ったのです。その時に、朝日新聞の高田晴彦さんという社会部の記者がいてね、主婦連のことをよく記事にしてくれました。あまり主婦連のことを書きすぎて、GHQから呼び出されて高田さんは怒られたことがあるそうです。それくらい消費者の目線で記事を書いてくれたのです。それで、その彼の奥様が、共立薬科専門学校の先生で、奥先生は高田晴彦さんにあなたの奥様は科学者だそうだけど主婦連の仕事を手伝わないかと誘い、日用品試験室の初代室長として見えたのが高田ゆりさんです。

試験室というから何があるのかって（高田さんが）現場に見えた時、彼女は驚いて私に言いました。「ひどいわよあなた」って、どうしたの？って聞いたら、「（奥先生に）あなたここで（テストを）やれるでしょって言われたけれど、コンロが二つあって、流しが一つ、だから普通のお勝手と同じですよ。ここで（テストを）やれるでしょうって言われたのです。こんな家庭と同じようなところでテストなんかできないですよ」と。彼女は主婦連に来てからも、共立へ行って、共立の先生に協力を頂いてテストをしたのです。これからの時代は科学的な分析をして消費者運動を進めていかなければならないって。この言葉もすごいですよね。普通の家庭と同じところでやれるでしょと言われて、高田さんもそこで一生懸命やってくれました。まだ消費者センターも国民生活センターもないし、役所なんかやってくれないし、企業も手伝ってくれないし、だから高田さんがやってくれたテスト結果がずいぶん役に立ったんですね。これが自慢できる一つのことです。

⁵「消費者運動に科学を 高田ユリの足跡」2009年（高田ユリ写真集編集委員会編）P11

一方、高田ゆりさんは、主婦連たよりに次のように記事を載せています。高田さんが商品テストに誇りと夢をもって取り組んでいた熱い思いが垣間見えます。

「私の夢～主婦のための実験室（高田ゆり）」

（主婦連たより・昭和 25 年 12 月 1 日 第 21 号）

暖かい思いやりと、十分な設備機械と、豊富な薬品や器具を与えられて、私の仕事である飲食品、化学薬品、化粧品の試験に加えて、空気や土壌の検査まで、十分な時間をかけて行なうことができ、その結果が主婦の生活を向上させ家庭の不幸をなくすために、少しでも役立てられたら・・・こんなにうれしいことはないのです。（中略）政治が婦人をも含めて国民みんなのものであるように、化学もまた学者だけのものではないと思います。小さな台所の化学は家庭の経済へつながり、育児の栄養に活かされ、やがて大きく社会的に実を結ばずにはいないでしょう。買い物にでも行くような気持で相談できる“検査の窓口”。私の夢見る実験室は主婦たちの「化学」への興味と信頼を呼び起こす扉の役割も果たしたい。

8 主婦会館の建て替え

奥むめおは、1997 年（平成 9 年）7 月 7 日に、脳動脈硬化症のため 101 歳で亡くなりました。主婦会館は、その年の 10 月に建て替えが完了しました。奥むめおは、新しい主婦会館を見ることができなかったのです。

奥むめおさんが病気になって、私と中村紀伊さんは、車いすでもおんぶしてでもいいから、生きていけるうちに一番で入れてあげたかったのです。それで急いで建て替えようと。私とあなたが言わなければ建て替えられないからやろうと言って、2 人でやり出したのです。建ったのが 10 月。奥先生が亡くなって 2 カ月ぐらいて、オープンしました。だから、入れなくてかわいそうでした。どうしてもあれをやりたかったけれど。

〈建て替えられた主婦会館〉



9	貸室【スズラン】	男女
8	貸室【スイセン・パンジー】 / 和室	男女
7	貸室【カトレア】	男女
6	オフィス	
5	オフィス	
4	貸室【シャトレ・エミール・マドレーヌ・ロワール】 クリニック・主婦会館 事務局	男女
3	貸室【コスモス】 主婦連合会事務局・消費者相談室・常設展示室	男女
2	エフスペース&ランチビュッフェ	男女 障害者
1	エントランス/フロント 自動販売機・コピー	AED 禁煙 男女 障害者
B1	通訳ブース	男女 障害者
B2	多目的スペース・貸室【クラルテ】	男女 障害者

駐車場

主婦連をとり

主婦連創立50周年迎える
新主婦会館プラザエフ完成

力を出し合い、生活者優先の社会を

21世紀へのスタート

次をめざす仕事を

消費生活動員会カンパ

1998年「主婦連たより」第590号

建て替えるとき、たまたま私が会長のときで、企業に寄付をお願いしているので、企業の人が寄付をくれたのです。そのときに、（企業の人が）「僕たちは主婦連だから寄付するけど、会館に寄付する筋合いはない」、と言ったのです。会館をみんな（それぞれが）持っているから、同業者に寄付するようなものだからそれはできないと言われたのです。それで私のほうにお金を持ってきた人がいるのです。それで、私がもらっても関係ないのだけど、と言ったら、「僕たちはあなたにはあげられるけれど、会館には寄付できない」、と言って、私は5人ぐらい受け取って、会館に届けに行きました。

9 主婦連と地婦連

日本には、大きな功績を残した消費者団体が多数ありますが、その中でも主婦連と地婦連は代表的な団体です。草の根運動という点では同じように見える両団体ですが、一定のすみ分けがありました。鳩子さんがその背景を語りました。

地婦連の創設者は山高しげりです。東京都の地婦連で田中里子さんが事務局長になるまでは、地婦連は消費者運動はやらず、社会教育、社会事業を行っていました。子どもの問題とか、女性の問題とか、教育の問題とか、生活改善とかですね。それはどうしてかという、奥むめおと山高しげりの約束事でした。例えば県全域の女性が町内会に入るみたいに入っている福井県連合婦人会。そのときに、奥さんと山高しげりさんが約束をしたのは、主婦連に福井県婦連も入る。地婦連に県婦連も入る。その代わり、消費者問題は主婦連でやる。社会教育は地婦連でやるというふうに分けたのです。だから県婦連とか、熊本もそうだし、どこの県もそうですけど両方に入っていたのです。両方に入っているのは変だと言う人もいて、経企庁の人などに同じ人が両方になぜ入っているのか、おかしいと言われましたが、役割分担していたのです。それが、田中里子さんになったときに、カラーテレビの二重価格の問題で消費者問題を始めたのです。やはり時代の要請で、社会教育だけでは県の地域では持たないですね。物価問題もやらなければならぬ。田中里子さんが、消費者問題を地婦連のほうに定着させたのです。それは里子さんの功績だと思います。

「会の目的」（各団体ホームページより）

主婦連合会

～消費者の権利を確立し、いのちとくらしを守る社会をめざします～（2017年度活動方針）
世界に誇る現日本国憲法を維持し、国民主権、基本的人権、平和主義を守るために行動します。限りある資源、かけがえのない地球環境を守るために行動します。消費税増税に反対すると共に税の使い道の監視に努め、公正な税制実現のために行動します。東京電力福島第一原子力発電所事故を決して風化させることなく、脱原発に向けて再生可能なエネルギーへの転換が進むよう取り組みます。消費者庁が真に消費者の権利確立のための政策を推進するよう働きかけます。情報化社会で懸念される新しい消費者問題に取り組みます。JIS,ISOなどの標準づくりに消費者の意見が反映されるよう取り組みます。主婦会館プラザエフを拠点に、情報発信や啓発活動を展開し、運動の活性化を図ります。

全国地域婦人連絡協議会

本会は地域婦人団体の連絡協議機関としてその共通の目的である男女平等の推進、青少年の健全育成、家庭生活並びに社会生活の刷新、高齢化社会への対応、地域社会の福祉増進、世界平和の確立などの実現につとめることを目的とする。

<参考>

西暦	和暦	消費者運動・政治など
1948	S23	◇大阪主婦の会、物価引下げ、闇値撲滅を目指し、牛肉不買スト突入（8月） ◇不良マッチ退治主婦大会開催（9月） ◇主婦連合会結成（10月）
1949	S24	◇主婦連「主婦の店」選定投票実施、運動全国に広がる（3月） ◇工業標準化法（JIS法）公布（6月） ◇主婦連、新橋駅前「不良品追放デー」実施（11月）
1950	S25	◇婦人代表（赤松常子、江上フジ、野村かつ子ら）10名が米国の婦人運動を視察（2月） ◇主婦連、日用品審査部開設（11月） ◇主婦連等、都内各駅頭で米価値上げ反対署名運動（12月）
1951	S26	◇日本生活協同組合連合会（日生協）結成（会長：賀川豊彦）（3月） ◇主婦連、「みまわせ運動」など掲げ街頭へ（おしゃもじ登場）（9月）
1952	S27	◇全国地域婦人団体連絡協議会（全地婦連）結成（理事長：山高しげり）（7月）

10 未来への提言

鳩子さんは、未来をみえています。組織の存続と、これからの消費者運動について、次のように語っています。

組織の存続を考えると、年齢的に若返りさえすれば良いというものではありません。主婦連の会長たるもの、主婦連の生い立ちを十分に理解し、創設者の思いを引き継ぎつつ、新たな時代に備えて理論武装しなくてはならない。ただ〇〇反対と主張したってだめ。また政治（政党）との付き合い方も熟知していなければいけない。ここの政党の機関誌に主婦連の写真や意見が掲載されたら、組織内外・社会へどのような影響があるのかということまで考えないと。

フランスでは授業料の値上げに反対する学生がデモを展開していると聞きました。日本のいまの世代の人たちも、この真似ぐらいはできないものかと思います。私はもう一回こういう風に戻れないかなと思います。消費税に関して、皆、何もやらないのです。消費税について取り上げると、共産党系とそうでない政党とに完全に対立してしまうからです。だから誰もやらないのです。どうせ上がるでしょうと言って、何もしない。

それで、私はいま誰かと幾人かでやろうと言っていますが、学者が見つからない。10%にすれば言われたら、反論できるのか、できないのかというのも、こちらは勉強しておかなければ、けしからんとだけ言っていてもしようがないですね。どこかでそういう勉強会をやっているところはないのと聞いたら、あるけど、やはり共産党系とか社会党系だけのようです。それだと答えがもう分かってしまっていて、ちょっとやりにくいねと言っています。



おしゃもじを持って平和憲法の大切さを訴える鳩子さん（左）

11 おわりに

鳩子さんは、最後に、自身が消費者運動に携わったのは「めぐり合わせ」だと言っています。奥むめおを伯母にもち、若き日に戦争と向き合い、人々の生活が混乱し、そうした日々の中で自然と消費者運動に邁進するようになったのです。

私はこの仕事をするのは目的意識でやっているのではないのです。

いつの間にかしよがなくやっている。

そういうめぐり合わせみたいなものがあるのでしょうか。

でも、きっと嫌いではないのですね。

私たちは、いま、政治に何を望むか。議論すべきなのです。原点に戻る。「台所の声を政治に」口先で論理的に批判することは簡単ですが、データをもとに相手（行政や政治家）を説得することが大切。

相手を動かすのは「数字」「データ」。最近の消費者運動に欠けているところです。自分たちの足でデータを集める、これが大事。「下手な評論家」になってはいけない。「大勢の消費者が言っている」これだけではだめ。

貧しい人が苦しんでいるなら、その貧しい人のデータをもってかなくてはだめ。

93歳を迎える鳩子さんは、ヒアリングを通して次世代への思いを力強く語って下さいました。消費者運動の歴史を実体験として語れる方は今となっては数少なくなってしまいました。鳩子さんの半生とともに、消費者運動の秘話や思いなどを記録しました。



仲間と共に



清水鳩子さんと加藤絵美

語り手
聞き手・執筆
監修

清水鳩子
加藤絵美
細川幸一



日本女子大学
JAPAN WOMEN'S UNIVERSITY

2017年度消費者運動史研究報告書

2018年1月25日

清水鳩子さんに聞く 日本の消費者運動史 消費者運動との「めぐり合わせ」

発行：日本女子大学家政学部消費生活研究室

東京都文京区目白台2-8-1 TEL03-5981-3487